九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

第3回研究大会課題研究シンポジウム「学校完全週五日制と子どもの生活」

https://doi.org/10.15017/9041

出版情報：生活体験学習研究. 3, pp.105-126, 2003-03-01. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

第３回研究大会
課題研究シンポジウム
「学校完全週五日制と子どもの生活」

日　　時：2002年２月23日(土)　14：10～16：30

場　　所：福岡県社会教育総合センター

コーディネーター：古　賀　倫　嗣（熊本大学教育学部）

シンポジスト：相　戸　晴　子（子育てネットワーク研究会）

上　野　景　三（佐賀大学文化教育学部）

竹　本　あずさ（大分県中津市如水保育園）

松　井　参　伍（福岡県福間町教育長）

日本生活体験学習学会誌　第３号　105―126（2003）

課題研究シンポジウム
学校完全週五日制と子どもの生活

日時：2002年２月23日（土曜日）
午後２時10分～４時30分

コーディネーター：古　賀　倫　嗣（熊本大学教育学部）
シンポジスト：相　戸　晴　子（子育てネットワーク研究会）
上　野　景　三（佐賀大学文化教育学部）
竹　本　あずさ（大分県中津市・如水保育園）
松　井　参　伍（福岡県福間町教育長）

古賀

振り返ってみますと、ちょうど、10年位前に学校は第２土曜日が休みになりました。それが平成７年の４月から第４土曜日も休みになり、さらに今年の４月から、完全に土曜日がすべて休みということになります。そこで、これからどうしたらよいのかということでこのところ色々言われています。

例えば、学習塾の経営者を含めて、とにかく体験的なことをやっていこうとか、色々出ていてまあ訳のわからない話になりつつあるようにさえ思われます。ただ、今日のテーマに関して申しますと、子どもたちを対象とする調査、あるいは保護者を対象とする調査では、小・中学生の子どもたちの６割から７割が「ボーっと過ごしたい」と答えています。また、保護者も、「子どもたちの好きにやらせたい」ということで、どうも私たちが体験活動の機会にしたいというふうに、そういう意味合いで考えてきた完全学校五日制とかなりのずれが出てきたようです。

そういったアンケートは、私たちがきちんと子どもたちの生活の変化というものを捉えていたのかどうか、あるいは、学校が休みになるということが、子どもたちの生活にとって、どんな意味があるのか、こんなことを本シンポジウムでは柱に考えて行きたいと思います。この学会が生活体験学習学会であるということの意味合いを考えまして、やはり、教育制度が変わっていっても、子どもたちの生活の中身はどうか、それに対して、学校を含めた地域がどのようなプログラムを提供できるのか、こうした課題をうみ出している現実を踏まえ、今回テーマとして挙げさせていただいたところであります。

さて、ご意見をいただく順序ですが、私に近いところから、保護者の代表ということで、相戸さんです。そして、次の方が、今回の改革の中で、学童保育について新しい光が当てられました。そういった非常に重要な役割が期待されているということから、学童保育を実際に担われていらっしゃいます、竹本さんです。そして、学校教育・社会教育・家庭教育含めて教育行政というお立場で、教育長を務めておられる松井さん。そして、研究者の立場から、全体をフォローしていただくという形で、上野さん。４名のシンポジストです。私は司会を務めさせていただきます、熊本大学の古賀でございます。

次に、進行についてお話したいと思います。４人のシンポジストの方には、大体３回ご発言をいただく予定です。１回目は、第Ⅰラウンドと申しましょうか、それぞれのシンポジストの方にとって、学校週五日制とはいったいどういうものなのか、また、身の回りに関して、この完全実施に向けてどのような課題が出てくるのか、自己紹介を兼ねて、ご自分のお立場から、学校週五日制とは一体、何なのか、ということをお話いただきたいと思います。第二ラウンドは、子どもたちの当面している生活課題とは一体、何なのか、生活課題を明らかにすることは、生活体験プログラムというものに結びついていくわけですけれども、日常的に子どもたちが抱えている問題状況を、具体的にお話いただき、その中で、学校週五日制は、問題解決に有効か、あるいは、どのような変化が期待されるのか、そういったことを２回目にご発言いただきます。そして、３回目に、子どもたちの生きる力の獲得をめざすため、地域の教育力の再生、その・方策、そういったことについてお話いただきたいと思います。活性化フロアーの皆さんたちとのやり取りの時間も考えておりますので、進行へのご協力よろしくお願いいたします。

それでは、早速、中身に入って行きたいと思います。第Ⅰラウンド、私にとっての学校週五日制とは、ということで、自己紹介を兼ねまして、まず、保護者の立場から、相戸さん、口火を切っていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

相戸

こんにちは。三人の子どもを持つ保護者の立場から、発言させていただきます、相戸と申します。ちょっと不慣れですので、ご迷惑をかけることがあるかと思いますが、よろしくお願いします。私は、毎日の子育てで、日々直面してくる問題に向けて、現在仲間と交流したり、情報交換をしたり、地域の子育て環境について学んだりしながら、よりよい子育てを目指して、地域の子育てグループで活動をやっています。本日は、間近に迫った、4月からの学校完全週五日制の、子どもの生活についてのテーマで、一母親の立場から、また、子育てグループの活動の中で見えてきたところをお話できればと思っております。

最初のご質問の週五日制とはというところで、どんなことが課題かというところなんですが、保護者としての課題を考えてみます。学校などから、沢山お手紙をいただいたり、先生方の盛んな会議などで、完全週五日制を前に問題視されているといういった感じが取られるんですが、残念ながら保護者の立場としての実態は、学校や地域で問題視されているほど、それほど問題意識がまだ芽生えてないかなあという様子を感じています。共働きをされているかたにとっては、そういった土曜日の勤務時間に触れる場合などの関心はあるようですが、家庭で子育てをしているご家庭にとっては、どうなのかな、よく分からないなあというのが実際のところだと思います。今でも月に二回は土曜日休みですよね、それが二回、まあ、半日の学校で過ごす時間がなくなるとすると、一ヶ月にして8時間、まあ、たった8時間家庭に戻ってくるという、ある意味短絡的に考えていて問題意識が芽生えていないかなといったところではないでしょうか。

ところで、近年の福岡県の虐待の件数を、児童相談所の報告から知る機会があったのですが、身体的・精神的・性的虐待の伸び率の群を抜いているのが、ネグレクトすなわち、育児放棄です。育児放棄については、近年話題になっている問題です。程度の差こそあれ、われわれ現在子育てをしている保護者も何らかのネグレクトでないかという、まあ、ネグレクト症候群とでもいうんでしょうか、そういったところがあるのかもしれません。しつけや自立のために、ほったらかしにしている、育児放棄といいますか、ネグレクトもあります。少々混乱しているような状況を感じています。その典型的な例として、メディアやゲームなどバーチャルリアリティの影響があるかと思います。家庭に常にこもっていたり、人と交わる遊びが全体的に減ってきたことは、人間関係の力の低下につながっています。

このように人や自然との関係を調整するという力の低下が顕著に見られる状況があります。このような子どもを取り巻く自然体験・生活体験、創造性の体験などの環境は、保護者自身が体験を剝奪している場面も多々あるんじゃないかと思います。学校週五日制を機に、親自身が、家庭教育のあり方を問われる時期に来ていると感じています。しかし、親たちの問題意識はあまり芽生えていないという現状を考えると、保護者の立場から敢えて問題視していないこと、親自身が問題視していないということが課題ではないかと感じています。だからこそ、子どもたちが健全に成長するために必要な子育て支援はなんなのか、という視点が必要ではないかと考えます。後半はこの視点から考えさせていただきたいと思います。

古賀

ありがとうございます。

それでは次に、保育園という立場から、竹本さんお願いいたします。

竹本

こんにちは。なずな児童クラブに勤めて丁度6年目になります。竹本あずさです。どうぞよろしくお願いします。私の勤めておりますナズナ児童クラブは800坪の敷地に、グランド、畑があり、静養室、台所、風呂、トイレ、12階、ホールからなる児童館が建っています。平成7年9月に設立、10歳までの一つ、二つと数えられる10年間を「つ」のつく時代と呼び、この時代に子どもたちが群れを成して遊ぶこと、実体験を度重ねること、この二つが何よりも大切であるという信念を元に、如水保育園の卒園児達が卒業してからも、「つ」のつく時代を保証出来るようにという思いから、このクラブは立ち上げられております。

しかし、現実は熱い思いとは裏腹に、放課後対策事業としての市からの補助、保護者からの月7千円の会

費で厳しい運営をしています。平日の保育時間は２時から６時、土曜日は９時から５時まで月一回の土曜日、日祝日を除いて、毎日開館しています。９月の時点では、55名だった児童達も38名と減ってしまいましたが、２月現在１年生１９名、２年生８名、３年生８名、４年生１名、５年生１名、６年生１名が通ってきています。

さて、週五日制が学童にどういった課題を投げかけるかですが、まず、月一回の土曜日を閉館しているので、一日活動できる土曜日が月三回となります。今まで土曜日にまる一日学童で過ごす日は、工作、遠出の散歩、海、山、集団遊びをじっくりしてきました。毎週二回設けている手作りおやつも、手の込んだおやつを作ったりと楽しく過ごしてきました。一日増えた土曜日も、そういった子どもたちが児童クラブでの楽しいと思える、生活が楽しいと思える、しかも集団遊び・実体験を踏まえた活動をしていこうと思っています。ナズナ児童クラブの子どもたちを見ていて思うことなのですが、一番時間にゆとりのあるべき子どもたちが、サッカーや野球などの社会体育、またや塾や習い事にと時間に追われています。個人的には増えた土曜日は、ますます子どもたちの忙しさに拍車をかけるのではと心配しています。前述した二つのこと、群れを成して遊ぶこと、実体験を積み重ねることが、この追われる時間によって奪われていくように思えるからです。何事も多様化と言われる今、子どもたちの放課後の過ごし方もまた多様化してきています。どういう選択肢を持って過ごすのかも、家庭家庭の、またその子その子の考え方だと思います。そして、児童クラブも、その選択肢の一つであることは事実です。

しかし、この時期に大切にしなければいけないことがあるのも事実です。学童保育は、その大切なことを地域に投げかけ、参加型の企画を行ったり、また子どもたちが今まで以上に学童保育に来るのが楽しいと思えるように、日々の生活を設定したりという課題が色濃くなってくると思います。そして競い合うというという言葉は強いのですが、子どもたちの放課後の過ごし方が自由競争の波にもまれる中、ナズナ児童クラブもその競争の一部であるという現実。その結果がナズナ児童クラブをよりよい学童保育にし、沢山の子どもが集まり、その分、群れで積み重ねる実体験が、子どもたちに子どもの時代を取り戻させると信じています。

古賀

はい、ありがとうございました。このシンポジウムで子どもたちというのは、一応小学生を念頭において考えております。つまり、中学生や高校生色々あるわけですが、「発達」という観点から「生活体験」の問題が一番大きく小学生に表れるということからです。そういった意味で今、竹本さんからお話しがありましたけれども、保育所と学童保育とを「つなぐ」ということが、今、重要になってきました。そのことに関する課題は本当に大事なことで、もっと議論していきたいと考えております。それでは、３人目に松井さん。教育長のお立場からご発言お願いいたします。

松井

ご指名いただきました松井です。福間町ですけど、ここから、40分くらい北九州市よりに行って、人口４万人前後という町です。自己紹介しろということがございましたので、ちょっと特異な経歴になるんじゃないかと思いますが、40年間中学校の教員をしておりました。それも、教科は音楽で。福岡県で音楽の教員が教育長になったのは私が最初ということをある人から言われて、えっと思いました。それから中学校で学年主任も教務主任も、一切やっておりません。単なる平の教員でございました。そして最後の10年間は管理職をしておりました。ただまあ、昭和40年ごろから、吹奏楽、今、吹奏楽はブラスバンドといわれています。これは最初から私が手をかけたというところで。その面では、社会活動、ボランティアということです。45年の間。吹奏楽部に関してはやってまいりまして、90年から会長を務めております。飛び梅国体、植樹祭というものがありまして、音楽の関係ではそれの構想から中身までやりました。これ自慢ではありませんで、そういうような社会活動はした、ということで申し上げます。

したがって、行政のことに関しては、私もまだ素人。６年しか教育長はしておりませんので。それまで行政に入って指導主事したとか、そういうものがございませんので、まあ、思い切って、あるいは、知ってる事柄の中でこんなこと言ったり、考えたりしております。

この冊子の中にも行政の立場であるということで書きましたが、これは単なることばの羅列であると。思いつくままを書いただけということで、一つご容赦いただきたいと思います。この順序で話を進めていきたいと。

ご存知のように5日制になりますと、二日間が家庭に完全にということになります。でも、中教審から、だいたいもう五日制の方向性というものを、あそこで考え方が確立して、その手立てが飛行機で来たというふうに思っていいと思います。その間に、いくつか、いわゆるキーワードが出てきたと思います。その中で、一番最初に私たちが考えたのは、子育てのこれまでの原点は家庭であるということで、いわゆる親の責任が出発だと。そうしますと、学校に、学校教育に関しますと、子育てまで、しつけまで、社会が、親が、依存しているという、非常に大きな問題があったのではないか。　私の立場から、それからずっと申しておることは、学校がそういうことを手放すか、手放しうるかということでございます。とにかく、返すものは、返すべきところに返しなさい。本町はそれだけの判断と手立てを取れ、と言ってきまして。これ、なかなかみんな不安を持っているもんですから、手放す不安があるんですね。じゃあ、親にしても、受け取ることにして果たしてというようなことがあります。ですから、簡単に言えば、私たちの立場から言えば、右手で、私の場合利き手が右手ですから、その立場で例えてみますと右手で、学校教育を取り仕切っていく、あるいは、学校教育で子どものことを教育していくとすれば、そのうちの大半、子育てその他の大半は左手に持て、ということなんですね。左手は利き手でないのですから。重さとか、そういったことをどうするかということで不安があるというような状況ではないか。学校行事の中でも、それがあると思います。昭和46年にもう中学に居りましたので、中学のことでいきますと、学校の中で、部活動を社会体育、社会文化いわゆる社会教育の方に3年間移したことがあります。結局は、社会教育は持ちきりませんでした。また、学校に戻りましたというような経緯があります。そういうのは、やはり、右手と左手の利き手の力の違い、あるいは、あげるよ、じゃあ、やるよという受け皿が十分でない、しかし、今度はそうではない。もう返せない。ですから、利き手でない左手を、どのようにそのことに対応できるだけのものにするかというのが、行政の今、最大の課題である、と。おそらくこの中にも行政の方いらっしゃると思うんですが、私は自分ではそう考えております。で、それが、いわゆる、今度は社会にしても、地域にしても、あるいは行政の立場にしても、十分、それだけの準備と…心の準備とですね、物の準備がまだまだ地域によっては不足してるんではないか。用意すればいいってものでもないんですが、それでも、やはり、考え方とか、それから、いわゆる人とか、そういうような、いわゆる資源というんですか、それがない。そういうのが現実でないかなと思っております。ただまあ、それはしかし、さきほど例示しましたように、左手は右手に替えれないもんですから、力つけるというようなことが、行政に課されている問題ではないかと考えております。

古賀

ありがとうございました。それでは、この冒頭に少し、週五日制の導入のことをお話しましたけれども、それを詳しく、そして、一体そのねらいはどこにあるか、そのあたりを上野さんお願いいたします。

上野

それでは、私に与えられた課題は、五日制導入の経緯と目的といいますか、そういうことでした。お手元にプリントがあると思いますので、それをご覧いただきながら話を進めて行きたいと思います。まず、最初の(1)のところをご覧いただきたいと思います。これは、経緯と目的の部分ですが、この間、このシンポジウムをお引き受けいたしまして、いろいろポジションを調べてみました。それで、分かったことを書いております。学校週五日制は、学校における授業日を一週間のうち5日とし、休業日を2日とする制度である。日本においては戦後改革の時期にアメリカ、GHQの指導の下で、一部の地域学校で実施されたり、また高度経済成長期に週休二日制が導入されるのに伴い、文部省内で議論された経緯というものを持っています。しかし、高度経済成長期においては時期尚早論が多くを占め、そのままオイルショックが始まって立ち消えとなっております。その後、経済運動の高まりとともに、

一方では労働時間短縮というのが国際的な課題であり、これは1988年の閣議決定で経済５カ年計画というふうにして決まっております。これは何かというと、今から10数年前はバブル経済の時期でございました。そして、対外貿易黒字がピークに達したときだったというふうに記憶しております。その中で日本の一人勝ちという議論が随分言われまして、何故一人勝ちするのかというと、日本人が働きすぎるので、日本は国際世論から労働時間の短縮を求めるバッシングを受けたわけなんですね。それで労働省がいま、平均日本人は年2200時間働いている。これを2000時間に減らしていこうと言うようなことを約束してしまう。このために、企業に週休二日制を導入する、そのためには学校にも週５日制を導入しなければならないという議論になっておりました。これが一方での議論ですね。他方で、バブル景気の頭打ちが見られまして91年から経済大国から生活大国へ方向が出ました。これ宮沢首相のときですけれども。この、労働時間短縮と生活大国がワンセットとなり、学校五日制が取り上げられる。91年９月の、自民党学校週五日制小委員会の提言を受けて、短期間のうちに実施を見るわけでございます。ほんとに短い期間での協議でございました。この二つ目の、経済大国から生活大国へというのは何かといいますと、まだバブル経済に余韻が、私たちの生活の身近なところであったときだったんです。

しかし、国内の内需というものをどのように拡大していくのかというときに取られた一つの方策が日本列島リゾートブームでございます。佐賀県は49市町村しかありませんが、40市町村のうち、どこの自治体も長期計画というものを持っていた時代でした。それがこの後どうなったかというのはご存知だと思います。マリンリゾート、ゴルフ場、それに付属して生涯学習施設というものが、つくられていく。お父さんはゴルフへ、お母さんは焼きものへ、子どもはテーマパークへというふうにですね、ということがしきりに主張された時代でございました。そのためには、どうしても週休二日、それに休日を加えた３日というものが必要だと言われていた時代でございます。

その時が92年９月、９月12日ですが、国公立の義務制小中学校、養護学校で第二土曜日が休みとなり、95年から第４土曜日が加えられて、来年度から完全実施となるわけです。この導入の経緯を見ますと、教育の内在的論理から５日制が必然化したというふうには言えないわけです。このときに文科省、当時の文部省は５日制にどういうふうに言っているんだろうか、ということを、あれこれ公的な文書を調べてみたんですけれども、私が見た限りでは無いんです。学校家庭および、地域社会の教育全体のあり方を見直し、社会の変化に対応して、これからの時代に生きる幼児児童生徒の望ましい人間性というものを測ると小島喜孝氏は述べている。５日制導入にあたってですね、これだけしか述べていない、非常に不十分だということをこの先生は指摘しておられるわけです。そして、その他見ましたけれども、なかなかない。中教審でいつ言ったのかということについて見ましたら、平成８年７月に、次のように述べております。「生きる力は単に学校だけで育成されるものではなく、学校家庭地域社会におけるバランスの取れた教育を通して育まれる。特に、家庭や地域社会における豊富な生活体験、社会体験や自然体験は重要である。そうした点を踏まえて、今日の生活のあり方を省みると、子どもたちは全体としてゆとりのない忙しい生活を送っており、様々の体験活動の機会も不足し、主体的に活動したり、自分を見つめ比較するといった時間も少なくなっているというのが現状であり、こうした現状を改善する意味で、家庭や地域社会で生活時間の比重を増やし、子どもたちが主体的に関る自分の時間を増やしてゆとりを確保することは、今日の子どもたちにとってきわめて重要なことであると考える。これらを言い換えれば、子どもにとっての、学校・地域・社会のバランスを改善してよりよいものとする必要がある。」ということがあり、これ、第２次答申での教育のあり方についてですけれども、学童児の生活にゆとりを確保して家庭・学校・地域で生きる力を育成するということが大切であるということを、中教審答申の中では言っているわけでですね。では、この５日制の導入に対して、社会教育サイドからの動きとしてはどういうふうな見解が見られたかというと、やはり、土曜日の受け皿をいかにつくっていくのかという点に費やされていると思います。

例えば、全国各地で展開されました、そしてこれは文部省がその当時、かなり予算をつけたものですけれども、少年少女地域サークル活動促進事業や、土曜日

における公民館で色々な各種事業を展開してほしい、また学校を開放する、特に養護学校などではですね、第4土曜日の午後をどうするのかという議論などもなされているようですし、社会教育施設へ、子どもの指導に入るなどという動きなどとして、実際には展開をされたということなんです。しかしこの経緯を見ますと、二つのことが指摘できるかというふうに思うんですが、5日制の議論、いわゆる土曜日どうするのかという議論に傾きがちなんですね。

ところが、この経緯、また中教審の指摘なんか見ますと、土曜日をどうするかということを、主眼にしているわけではなくて、家庭や学校や地域社会のバランスというもの、これを教育的にどういうふうに再編することが出来るのかという議論を展開しなくてはいけなかったんだろうと思うわけです。ですから、5日制の議論というものは、5日制を切り口としながら、家庭や学校や地域社会の教育的なバランスというものがこれでいいのかということを見直すことを私たちはしなければならないだろうという課題が一つあるかと思います。

そして、もう一つは、この中でゆとりを取り戻すということを言ってるわけですけれども、ゆとりを取り戻す中身というものが、生活体験そして社会体験・自然体験というものを、今子どもたちに不足しているので、それを取り戻す機会として5日制を考えてほしいということを言ってるかというふうに思うわけですね。だとすると、この5日制…土曜日休みになるだけではなく、子どもたちが学校や家庭、地域の中で生活体験というものをどのように取り戻していくことが出来るのか、ということを、この5日制導入に当たって、考えていかなくてはならないと考えています。

古賀

はい、ありがとうございました。今、4人の方の発言を聞きながら、十年前のことを私もチラッと思い出しました。私は、性格的に陰湿な人間でして、それは昔も今も変わらないのですが、10年前の9月にですね、学校週五日制が始まるということで、あちこちの県とか市町村の教育委員会に電話をしまして、学校週五日制に変わる法的根拠はなんでしょうかって、尋ねて回ったことを思い出しました。殆ど回答がありませんでした。で、多分知らなかったんでしょうね。いま、上野さんから、こうやって説明ありましたけれども、みなさん国会で決まったとばかり思ってましてね、学校教育法の改正なんかあったかなあと考えておりました。これは単に施行規則を変えただけ、まさに官僚が話し合っただけで100年続いた土曜日が休みになるという驚きを、今改めて思い出したところです。さて、今、4人の方に、自己紹介を兼ねてということでご発言いただきました。まず相戸さんからは、保護者の立場からお願いしたんですけれども、保護者の間では、こうした学校週五日制の話題はあまりないと、むしろ、いわゆる共稼ぎの方で、土曜日に働いている方には話題になってるかもしれませんけれども、一般的なところでは、話題になっていないという、保護者の側の受け取り方が一つ指摘されました。それと、子どもたちの問題で「ネグレクト」という言葉が出ましたけれども、この問題をやはり子どもと大人との向き合いといったレベルできちんと捉えなければ、ということも指摘されておられました。むしろこういったことをきちんと検討しないと、この学校週五日制の問題というものは明らかにならない、そういったことを、おっしゃいました。二番目の竹本さん。竹本さんがいらっしゃいます中津市の如水保育園は、二の学会でも何度も報告していただいております。私の記憶に残っていることを一つだけ申し上げますと、保育園の卒業論文にですね、雑巾を作って出て行く。どこの小学校でも新入学には雑巾を持って来るというのがありまして、だいたいあれ、スーパーで買いますね。如水保育園では子どもたちがちゃんと雑巾を縫えるだけの能力を、すなわち生きる力をつけてるんだということが、私の記憶にあります。そこの活動が5歳で終わるのではなくて、竹本さんがおっしゃった話では、10歳まで移行して、この学童クラブを引き受けていると。それと、やはり、群れといいますか、集団遊びというものをどういうふうに位置づけていくのか、そして子どもたちの問題に触れていただきました。これについては、第2ラウンドで、より大きな活動、枠組みの中で、子どもたちの変化というものをお話いただきたいと思っております。松井さん、教育長のお立場でなかなか言いにくいところであったと思って、ほんとにありがたかったんですけれども、まさに今回のですね「もう返さない」と。

20年前は一回社会教育の側が引き受けた部活をあの時は返した、と。私の熊本県では、そういったことを昭和60年代にやりました。これは失敗しましたけれども、こういった形で、今度はやり返しがきかない、こういうようなことをおっしゃいました。まさに受け皿というものが、今度ばかりは受け皿が臨時的なものではなくて、何と申しましょうかね、受け皿というのは雨が降るから雨漏りするからというのが受け皿なんですけれども、教育改革の中では、雨漏りするような建物は基礎から作り直そう、そうすれば「受け皿」自体が不用になる、という話になるかもしれません。最後に、上野さんからは、学校週５日制というものが、教育の側から出てきた結論ではないということ。まさに労働時間短縮であるとか、消費拡大、余暇時間というんですかね、そういった契機から始まったために、未だに学校を含めて、学校週５日制というものの位置づけが、しっかり見えてこない。その時々に、たとえば、「ゆとり」といったふうに表現したり、様々なことがあっても、根本的に教育の内在的な議論ではなかったということが指摘されました。それともう一つ、土曜日をどうするかというふうに私たちは考えがちですけれども、むしろ、家庭・地域・学校のバランスをどういうふうに作っていくのか、そういったあたりを基本的な視点として提案されたように思います。社会教育の人たちは、「学校週五日制」という言葉は、もう止めよう、「家庭・地域週２日制」という言葉にしようというようなことが出てくる。ちょっと前も、「月刊公民館」を見ておりましたら、学社融合ではいかん、社学融合にしようというようなことが述べられていました。私たちがどちらの立場に立つにしても、子どもの生活の現実をきちんと見つめることが非常に大切なことであります。そういったことで、第２ラウンドでは、最後に上野さんがおっしゃった、家庭・地域・学校のバランスをどうとっていくか、そのことを議論する前に、いったい子どもたちがどういった問題を抱えているからこそ、そういうバランスが必要になるのか、子どもたちの生活、子どもの生活に深く切り込んで、子どもたちの置かれた問題状況を議論していこうかと考えております。それでは、相戸さんから、今保護者の立場から見た子どもたちの姿、それはいったいどういったところが問題なのか、先ほど生活体験・社会体験、創造性といったところの問題を指摘されましたが、もう少し具体的に、どういったことが今、壊れているのか、そのあたりからお話いただきます。どうぞよろしくお願いします。

相戸

私は小学生の子どもがおりますので、その一人の母親の立場から子どもたちの姿を見てみますと、市町村や子どもに関する各団体が主催する実践活動がここ数年大変増えてきていると思います。地域の教育力や地域活動が、完全週五日制を前に推進されており、子どもの参加できる事業が盛んに行われていることを実感しています。子どもの居場所づくりから見ると、それは大変重要なものですし、親としては、地域や行政や学校が一体となって取り組んでいる姿を嬉しく思っています。ただちょっと心配しているのが、その実践のあり方です。その実践のあり方一つで、子どもにとって主体的な活動ができているのか、与えられてプログラムをこなすだけの受け身的な活動になってしまうのではないか、というところです。これは評価や効果が目に見えて来ないので難しいとは思うのですが、この主体的か、受け身的か、というところで、効果が大きく左右される可能性があると思っています。また、これらの事業を行う、コーディネーター的な立場の方々の力量や、その専門職の立場の方々の専門性がこれからどういうふうに子どもたちの大切な活動を作り出していくのかというところが課題ではないかと思います。子どもの発達課題や、生活していく中で直面する課題克服のための「生きる力」を養うためには何が必要なのでしょうか。そのためには、事業を考える上でも、普段の生活を考える上でも、大人たちが絶えず、振り返りながら確認しながら進めていく、必要性を感じています。また、先程から家庭といった言葉が良く出てきていますけれども、取り組まないと行けない、家庭の教育力の向上の視点から見ると、今されている事業については、疑問が多い。イベント型事業では、目に見えた実績とはなりやすいんですけれども、毎日の子どもたちの生活は、単調で地味で、平凡なものです。それを、イベント事業を行うだけで、(たまにはいいですけれども)、そういったことばかりが増えてきますと、保護者は、毎日子どもと向かい合って生活に根付

いていくための状況を形成できるかというと、随分距離がある支援のあり方ではないかと感じています。次に、現在私が、子育てグループの活動やっている立場から少し客観的に子どもの生活を見てみます。家庭の教育力の低下ということが言われていますが、やはり急激な社会の変化の中で、私自身も含めて、複合的に低下していると常々感じています。子どもたちの遊び、生活、勉強、メディアなど、随所に実際の生活体験不足が見られます。子どもたち、同世代の親の子どもたちを見ながら感じています。未発達・未熟な親の子育てが、子どもの生活への悪循環や、連鎖を生み出している状況があると考えています。しかし、そんな親たちは、教育産業には敏感に反応します。習いごと・塾や、何々教室だとかいう、様々な分野の、教育産業を熱心に利用しています。このように、家庭教育すら、外注化に依存してしまっている現状があると思います。このあたりも家庭教育力の低下で、混乱や困惑を生じてきている所じゃないかなと思います。

古賀

はい、ありがとうございました。続きまして、竹本さんから、保育園から見た子どもたちの姿はどうなんだろうか、あるいは、学童保育はどんな問題に対面しているのだろうか、そういったことにつきまして、ご発言よろしくお願いします。

竹本

とにかく忙しい子どもたちで、そんな子どもたちと学童での活動を共にして、日常感じている生活上の問題をここでお話ししたいと思います。まず第一は、身の始末ができないということです。これは忘れ物が多い、ものを片づけない、汚しても拭かない、また、豊かさの副作用でもあるのでしょうが、ものを大切にしないということです。第二は、人との関わり方を知らない、人間関係が分からなく、我が侭であったり、協調性がもてなかったり、年齢では考えられないほど、ベタつきを見せたりします。第三は体力の弱い子が多い。すぐに、疲れた、と言いに来る子が多く、それらの子はキャンプなどで生活を共にすると、朝食をとれないことが分かります。第四は、自然体験不足の子が多い。本園の卒園時以外の指導は、遊び・行事などの際、はじめて何々する、という子が多いのです。そして、その子どもたちを取り巻く親、大人たちは、前述した問題を、子どもたちが抱えているということに気づいていないということがほとんどで、大人サイドの一番の問題点ではないかと考えています。その結果、大きな行事の際、親の参加人数が少ない、また、本館を、単なる託児施設と考えていらっしゃるのだと思うのですが、放課後子どもを預けるだけ、社会体育など様々な理由がありますが、後半になると止めてしまうということが挙げられます。

それらの生活問題の改善に向け、学童保育での取り組みについては、まず第一に挙げた、身の始末について。生活グループを5つに分け、使った食器は自分で洗います。片づける等の習慣は児童が自分たちで分担します。おやつや昼食を手作りした時も同じく、用意・片づけなどの一連の作業も全て児童が作業分担します。第二の、人との関わりについてですが、なかなか異年齢で過ごす空間が持てない子どもたちです。一年生から6年生まで一緒に遊ぶことで、上の子が下の子の面倒を見、また下の子も、それを見て成長していきます。また長期休暇中は、三年生以上は如水保育園にボランティアに行ったり、近隣の中高生がボランティア、職場体験事業に来たりと、より広い年齢層との交流をもつことができます。第三の体力が弱い子については、親への連絡はもちろんのこと、キャンプなどの体力を共にする行事の際にはちゃんと朝食を取らせることも注意しています。また食事、おやつを自分たちで手作りすることによって、つくって知る、食の喜びを得ているようです。第四の自然体験不足ですが、町有林を借り、そこでの栗拾い、アケビ取り、野いちご取り、椎茸の粉打ち、木のツルにつかまり移動する、ターザン遊び、またその他に山登りや、海、川遊び、スキー体験と、部屋の中で思いっきり体を動かしリフレッシュする企画を多く取り込んでいます。その中で子どもたちは、普段の生活では刺激されない感覚器を使い、生き生きとした穏やかな表情を見せてくれています。以上が、生活課題に取り組んでいる日常の一部です。その際に指導員側として気を付けていることがあります。あくまでも、児童クラブは、子どもが、ほっとできる場でなくてはならないということです。課題は課題ですが、それに追われて子どもの安らぐ時間を壊さ

ないように、学校での緊張・疲労を抱えて帰ってくる子どもたちを温かく迎え入れて、元気になって家庭に戻れるようにと思っています、学校と家庭の間を取り持つ、スポンジのような存在であることを心懸けています。週五日制による生活課題の変化ということですが、先程お話ししたように児童クラブは、４週のうち１週の土曜日を休館日としています。４月からは、実質３回の土曜日が丸々一日活動できる日となります。月に３回も丸々活動できる日があるからこそ、できるという活動を取り入れ、先程挙げた４つの課題が少しでも改善されるようにこれからの努めていきたいと思っています。

古賀

はい、ありがとうございました。それでは、松井さんから、教育行政の立場からどのような実態や課題というようなことをお考えでしょうか。よろしくお願いします。

松井

先程も申し上げましたように、この道まだ勉強中ですが、教育行政としては、私は直接手を出して子どもたちを育てる、あるいは教育するものではないと認識しております。すなわち、何かにその手だてなり仕事を委ねて、それをいかにしてコーディネートするか。学校教育もそうですね。特に今回は学校長が責任もって判断して、そして教育の中身を構築していく、そしてそれも、個性的な特色ある学校経営をやるようにと。おおざっぱに言いますとそういうようなことが校長に課されていますし、保護者に対しても、地域に対しても、子どもに対しても、ちゃんとした説明ができるだけのものを作りなさい、というふうに言っております。今の子どもたちは、地域に帰りますと何をしていいか分からない。どうやって遊ぼうか。二日休みがありますと、これは勉強時間帯ではない、いかにして遊ぶかということの工夫をしなさい、そういうふうに遊びの世界を子どもたちに自由を増やしてやったというふうに思ってもいいんではないでしょうか。体験がないと、知識とか色んなことは自分の力になりません。いくら勉強しても、そのことをちゃんと自分の体に能力として蓄えるためには、色んなその元になった知識、知識を基にした体験が重要であるというふうに自分は思っています。

自分のことですが、私は小学校に行かなかったんですね。日本に６年間小学校が無かった、時代があります。その時に時代を過ごしましたので、小学校に行かなかったという変な表現をしてるわけですが、昭和16年から22年までは国民学校と言った、ということは、軍国主義の教育を受けたものですので、今、小学校教育がいいなあと思っておりますが。もう午前中、兵隊ごっこ、山から山へ、陣地を取って兵隊ごっこをやっておりました。それが授業ですね。そのためにはどういうふうなことをするかと、戦略とかですね、方法とか行動とか、そういったものは、自分たちで話しあって、それなりのチームはやってました。そういうようなことで、山と山を駆けめぐって、陣地を作ってやった小学時代です。生き物、生きているものはみんなのものです。ですから、どこの柿も食べましたし、みかんも食べました。桑の実も、それから、槇の実も、今の大人に聞いたらですね、「槇の実食べたことがありますか」ってこの前、私の町で入学前の親に聞きましたら５人でした。槇の実が食べられる。どういう形してるかご存じない方がいると思います。あれ、美味しいんですよね。そのような事柄が、今の親が知らない現状でですね、ですから、私は子どもの時から河の近くでしたので、私名前は、サンゴという名前です。変わった名前。三五、十五といつも言われる。小学校の九九の会の勉強の時は、三の段は特に苦痛でね。それこそ、音楽ですが、ほんとに小さな声でみんなが言うわけです。三一が一…だんだん増やしていく打ちに、三五、十五は割れんばかりの声になりまして。それ位私は皆さんに印象付けとります。それはまあそうとして。川をですね、一日かかって干してるんです。日曜日に。朝からバケツを持ってですね。それで、真ん中にずーっと右の堰から左の堰で、土手を作りまして、で、片一方を堰ききって、どんどんどんどんバケツ込みだ。魚、あのほら、岸の土手ですから出てこないですね。出てこないのを手で取り上げる。今度逆にこっちを堰ききって、というふうにして。これ一日かかるんですよ。そういうことをやっていましたら、日暮れする時期です。けれども、そういう体験の中でですね、私はたくさんのことを勉強しました。そういうのは、今の子ど

もたちはない。生きる力は今、キーワードですが、ここにも書いておりますけれども、ちょっときれいに書いておる。ホントはですね、究極の生きる力は、心豊かでものは、貧乏です。貧乏を経験した人はまず、生きる力が十分あります。私は生まれてから15の時に親が死にました。その間14年間結核で寝とりました。収入はありませんでした。いかにして飯を食うか、５人の兄弟が学校から帰ってきます。そうしますと、次から次に畑にやられるわけです。おまえはあそこの草とれって、暑いと行きたくないもんだから、割り当てを減らして報告しますと、その次は減らした分余分にですね、割り当てしよるんですね。そういったことで育ちました。ですから、いかに工夫をするかということは貧乏の中にある。これが究極の生きる力であろうと私は自分で思っております。今でも、かみさんよりも、私の方が上手です。今日のみそ汁はお父さん作ったと言えば、子どもは食べません。これははっきり評価が出てるわけです。

これを教育行政で見たときにですね、今の子どもたちに生きる力がなぜ必要なのか、なぜ、生活体験学習の学会があるのか、昔無かったですよね。学校ではゲストティーチャーで今あちこちでやってます。それは、だいたい昔遊びとか、昔の仕事とか、いうわけですね。そのゲストティーチャーの中に、当然今働いている親は呼ばれて無いんですよ。ほとんどが祖父母の世代。私どもの世代。これは自分たちで体験したものですから、それを親を頭越しで孫に教えてるみたいなもんです。だから今の親だって、ほんとに勉強しなければならない今の焦点ではないかというふうに私は思います。その手だては、やはり、コーディネートするのは私たちだろうというふうに思います。これは生涯学習の中でも盛り込まなくてはならない一つのポイントだと思うんですが、忙しいのにかまけて、やらない。やる意味がないのをそっちに転嫁してる人もいますし、ほんとに時間がない人もいる。というふうに見えてる。従って、今私たちがやるべきことは、やっぱり、場を設定するということと、その場の、モノがいる、ということですね。それは、ある程度自由に工夫して使えるようにしておくと、そういうことではないか。

古賀

はい、ありがとうございました。それでは上野さんから、子どもたちの生活課題と週五日制の絡み、今日、データを用意していただいておりますけれども、お話しいただきたいと思います。

上野

それでは、一枚目のプリントの(2)という所からにしたいと思います。子どもたちの生活課題との絡みで話をしてほしいという依頼だった訳なんですけれども、どうも、子どもたちの生活だけ見ていては分からないところがあるなと思いまして、私の方で、親と子どもたちの生活の実態と生活課題というふうに変えて報告をさせていただきます。そこで、私がここで報告しますのは、今日子どもたちが、または親が、週五日制についてどういう意識を調べているのか、ということを少し調べてみることからやってみました。そこで５日制に関する子どもたちの意識は、ゆっくり休み、寝る、映画・買い物など街中に出かける、高校生46％の回答があります。これは報道されているというふうになっておりますけれども。これは、３ページ目の資料をご覧いただきたいと思います。これ、文科省が、今年の１月31日に発表したデータでして、調査を依頼された子どもの体験活動研究会という所が実施したもののようでございます。これは、文部省、今の文科省のホームページで、閲覧可能になっているという話です。今日時間がなかったもんですから、全部見るということはできなかったんですけれども、少なくとも、日本教育新聞の報道を見る限りでは、高校では、ゆっくり休み、寝るというような回答と、街中へ出かけるという回答が、まあ、46％前後と集中しており、中学生でも同じ回答が見られます、36％。小学生ではテレビゲームやパソコンをするが３割、近所の空き地や公園で遊ぶが32％、三年生ではまあ26％。で、親たちが期待しているのは、家の掃除やお手伝いが59％。友だちと屋外で遊ぶが44％、勤労体験もしくは家で勉強は20％で、塾で勉強してもらいたいは１％だったということなんですけれどもね。それから特に、中高生になってきますと、この週５日制というものは、まあ、寝るか、休むか、映画、買い物に行くか、まあ、そういうふうに使ってみたい夢を持っているということみたいです。

同じく、日本教育新聞の、今年の新年号に出たものですが、次の資料、①の所を見ていただきたいと思います。これは５日制が導入される前の昭和55年、それから導入の平成２年、次が平成７年と、ＮＨＫのデータから引っ張ってきているものです。で、この土曜日の所を見ますと、小学生では、テレビがあんまり変わりませんが、学習時間がグッと減って、テレビの時間が３時間ですか…。中学生を見ますと、睡眠時間はあまりどうこうというのはありませんが、学業の時間が減って、テレビの時間がだいぶ増えて、レジャーの時間も一時間弱増えている。高校生でも学業時間が減って、テレビの時間が増えて、レジャーの時間が延びているというふうに言えるかと思うんですね。私が土曜日だけに注目して見てはならないというふうに申しましたのは、ここだけ見てると中が分からないな、というふうに思うものですから。平日の所などを見ていただきますと、特に高校生で顕著だなと思いますのは、五日制が導入されてからかどうか分かりませんが、学業の時間が、昭和55年に比べて一時間減るわけです。それに対して、テレビの視聴時間というものが長くなっております。下手をすると、テレビの視聴時間が小学生や中学生よりもですね、遙かに長い時間を高校生は平日に見ているということが言えるかと思います。日曜日になりますとテレビの視聴時間などがやはり、中高生の中でトップになります。学年が上がる、つまり上級学校に行くに従って、学習時間が減り、そしてテレビの視聴時間が増えるというような傾向というものが出てきているんではないかなと、これだけでここまで言うのは言い過ぎなのかもしれませんが、中学生のときには高校受験があるので、一定程度勉強しますけれども、高校生になってみるとどうもそうではないということが、出てきているんではないかなと思います。次に、親の意識として、家庭の教育力の低下などがこのシンポジウムでも指摘されているんです。その中身は一体何かということを考えてみたときに、私なりに感じているところでは、家庭の中で子どもたちに基本的な生活習慣を身につけさせるということ、そのことがおろそかになっている、またはその問題に対して親の感覚が麻痺していると思えます。2000年にある市町村のマスタープランを作るときに私もお手伝いさせていただいて、それで小中学生の調査をしてほしいと頼んでやってもらったことなんですが、この２段目のところから見ますと、小学校４年生から中学３年生までの全員を対象に実施し、757人の回答がありました。テレビやゲームの時間が小学校高学年から中学校低学年であって、３時間以上が小学校５年生47％、小学校６年生34％、中１で36％、昼夜ですよ、夜型の生活になると就寝時間は、全体の36％が夜11時以降で、睡眠時間が６時間以内と回答している子どもたちが15％に上っています。朝食を、時々食べない・ほとんど食べない・全く食べないを合わせると22％、家族みんなで食べるが26％に対して、「一人で食べる」も24％くらいになってるわけです。塾やお稽古事・スポーツクラブ活動に参加してるのは約８割、高学年になるほど学習塾の割合が高く、中２で31％、中三になると51％。高まる進学指導を伺わせる一方で、「何もしていない」も、中学各学年で25から28％あった訳です。この数値を見ていますと、これは子どもたちの生活のリズムと言うのが、小学校４年生くらいからであっても、下手をすると小学校の低学年であっても、就寝時間がものすごく遅くなっていて、先ほど竹本さんのお話しの中にもありましたように、朝食を食べないという子どもも増えている。そして、テレビやテレビゲームの視聴時間というものが長くなってしまっているという実態が伺えますよね。そして、このような生活リズムになっている子どもたちに、基本的な生活習慣をつけさせていかなければならないという親の意識も、多分に軽薄になっているんではないか、というふうに思います。これ、私の印象レベルでの話ですけれども、夜中のファミレスですとか、夜中のコンビニなどで、小さい子ども連れの親子連れ、親御さんを見ることが珍しくなくなったなあという感じが致します。大型店舗などでも、夜９時・10時まで開いてたり、福岡だと12時くらいまで開いてるお店などもあるんでしょうが、そういうところで、小さい子ども連れで来ておられるというご家庭も少なくないのではないかというふうに思います。親は一体、何を考えているのか、と言いたくなります。その次の所を見ていただきたいんですけれども、こういった背景には、産業構造の変換と親の就業形態の変化と言うものがあるんではないかと思われます。産業構造が、第１次・第２次産業から、第３次産業、特に流通サービス産業にシフトしていると。

就業形態はどうしても多様化せざるを得ない。今日、雇用体制が厳しく、読論する限りでは、母親がパート・アルバイト等に夜間・深夜にでかけるという就業形態が珍しくなくなってきていると私は見ています。これは鳥栖市でありますが、そこでエンゼルプランを今作っている訳なんですけれども、その時の議論や調査の中で、こういう意見が出されました。どういうことかと言いますと、この周辺に新聞社の工場であるとか、大きな倉庫らしきものが見えると。明らかにご存じの方いらっしゃると思うんですが、全国で、各地の自治体では人口が減っている、また、事業所数が減っているにもかかわらず、鳥栖市自体は人口が伸びているんですね。そして事業所も伸びている、事業所数も伸びているわけです。ですから、自治体としては発展を遂げている町なんですね。ただ、最近、事業所数は増えているんだけども、雇用者数は頭打ちになってきている、ということは、これは一人にかかる労働数というものが、非常に負荷がかかってきているというものを示していると言われてるんですね。この時に、職安の方が次のような意見を言われたんです。事業所数が増えている。そして、このほとんどが流通サービス産業である。ということは、どういうことを意味するかというと、例えばコンビニに、朝５時に弁当を並べるとすると、そこの弁当屋で働いている人の労働時間というのは、ほぼ深夜だと思ってほしい。そして、新聞を販売店にだいたい３時４時に並べるとすると、その前に新聞の折り込みという、広告の折り込みという仕事がでてくると。それも深夜になってくるんだと。そしてそういうふうに、女性の深夜労働が解禁になったことによって、こうした時給が高い時間に、母親の就業というものが流れていくんだということですね。それで私、知り合いの女性にちょっと聞いてみました。知り合いの女性といっても私の妻なんですけれども…。妻にですね、育児サークルなんかを一生懸命やってるもんですから、こんなことを聞いたんだけども、実際にそういうことがあるのか、ということを聞いてみました。そうしましたら、自分の知り合いの女性にいるというふうに言ってるんですね。どこで働いているのかと聞いてみましたら、24時間のコンビニと、24時間のファミレスだというふうに言っていました。どうして？というふうに聞きましたら、昼間のパートにでるより夜の方が時給が高いからだ、というふうに言っていました。そしてまた別の女性、この人は私の妻ではありませんけれども、育児サークルやってある方なんですけれども、どうして深夜に出るのかと聞いたら、昼間は子どもがいるので目を離すことができない、けれども、夜間であれば、子どもが一旦寝てしまえば、朝まで寝ているので、夜で他方が安心だというふうに言っていたんですね。では、お父さんは？お父さんも残業で遅くなるんですけれども、そのうちお父さんも帰ってくるだろう。だから、子どもが一人で寝ていてですね、一人かどうか分かりませんけれども、寝ていて、そして夜中に親がチェンジして働いているという、就業形態というのが実は珍しくない。どうしてそんなことをするのかというふうに聞いてみますと、ご主人の、旦那の方の賃金カット、ボーナスの支給がない、それをどうやって埋めるかと言うことを考えた時に母親が、仕事にでなければならない。そしてでるんであれば、少しでも賃金の高い方を選ぶ、また、そういう求人感覚があるということが、背景にある。だとすると、こういった家庭にとって見ると、一家団欒の時間帯はどこなのか。親子連れで買い物に行ける時間はどこなのかということを考えてみると、私どもがホームドラマを見るような時間帯では、ないのかもしれないというふうに思います。そうしますと、夜、11時以降に子どもを寝かせている親の顔が見たい、そう思います。しかし、それ以前にそういった時間にしか子どもを外に連れて行くことができない、また、家族で一家団欒の時間を持つことができないというようなご家庭が、実は私どもの見えない所で密かに進行しているのではないだろうか。また学校はこのことを把握してるんだろうかというふうに思うんです。確実に聞いたわけではありませんが、学校に親が自分の仕事の内容を届け出るのは多分日中の仕事のことなんですね。深夜まで働いていることを学校が把握しているということは、これは殆どないのではないかと思います。その中で、子どもは就寝時間が短くなり、睡眠時間も短くなって朝食をとらないというような結果が出てきてるんではないかと思います。そこで、五日制について、直接調査をしたのは北山町と言うところです。今年の１月に、急遽調査をやりました。ここで、文章で書いております％と、図表中の％がちょっと違っているところ

がございます。これは、複数回答を足してｎで割り、複数回答で出してるものを母数にして％を出していますので、実際に回答者の何割の人が出てる、という結果になってしまいました。で、これをちょっと注意しながら見ていただきたいんです。子どもと親の生活事態が大きく変わっているということが、これを見ると分かるというわけですね。ここで、右側の上の円グラフを見ていただきたいと思います。上は、塾やお稽古ごとへ子どもたちがどれくらい参加しているのかということをみたものです。小学生の所を見ますと、音楽、習字、そろばん、英会話、家庭教師、水泳、柔道、剣道、サッカー、ダンス、バレエ等、多様あるかと思います。子どもたちは色んなお稽古ごと、習い事に行ってるということが分かります。ところが、それを中学生で見ますと、音楽が若干あるものの、学習塾が34％というふうになっていて、色々なお稽古ごとを小学生の段階で止めているということが分かります。つまり、中学生になる時に、お稽古ごとは卒業し、部活と学習塾に備えるということが分かるんですね。ところが、学習塾に行き始める割合は、この資料では、中学校の１年生では26％、２年生では50％、３年生で48％です。つまり、１年生の段階から一生懸命学習塾に行くという子どもたちは北山町の場合は少なく、学習塾を辞めて、お稽古ごとを辞めてしまった子どもたちというものは、意外と時間があると見ていいかと思います。ところが、学校の先生方は部活で忙しいというふうにおっしゃっている訳なんですね。部活やってますから、というふうに言われる訳なんですが､では部活に100％入ってる子どもたちを指導されている中学校はどれだけあるかというふうに思うんですよね。先生方に聞きますと、１年生の時はほぼ100％入ると言われます。２年生３年生になると、それが80とか70に落ちて行くと言われるんですね。では部活で、出欠をきちんととっておられる所がどれだけあるかっていうことなんですよね。生徒指導の一環だというふうに言われるんですけれども、幽霊部員が多くなっている。なぜ、幽霊部員が多いかと言いますと、チャンピオンシップを目指すというのが部活であれば、レギュラーと準レギュラーさえいれば、練習がいいわけですよね。そうすると他の子どもたちは、球拾いを延々とやらされて、それが楽しい訳ではない。だとすると、部活に入っているものの、部活には行かずに土曜日の過ごし方と同じように町中に出かけた方が楽しい。あとは家に帰ってテレビゲームに時間を費やした方が楽しいのではないかというような姿というものが見えてくるかと思います。そこで、先程の勉強…円グラフの下の方の、勉強時間の所をみてみます。上が小学生で下が中学生です。どちらが勉強しているかということになるんですが、中学生の方が勉強していないというのがわかるわけですよね。30分くらいというふうに答えている割合、何もしない～30分位と答えているところが中学生の場合半数以上いるわけですね。そしてテレビの視聴時間を見ますと、小学生・中学生では、あんまり変わりませんが、やや、中学生の方がテレビを見ている時間が長いかなということが伺えます。では、その次に、休日どんなふうにして過ごしているのか、ということを見たのが次のグラフ、次のページなんです。あまり小学生と中学生変わらないかと思いますが、テレビを見たりするっていうのがやっぱりトップでして、その次に漫画、小学生の場合はテレビゲーム・トランプ、そして漫画。中学生も、テレビ・トランプ・漫画ということで､約４割以上の子どもたちが､テレビと雑誌とゲームに休日を費やしてるということが分かります。これはその他にすることがないのか、要するに選択の余地があまり無くて部活にもあんまり行かない、試合にもあんまり行かない、そうすると、家ですることがなくて先程言ったテレビと雑誌とゲームの３つに、時間を委ねてしまっているんではないか、そういう中学生の姿というものが見えてきます。またそういう中学生予備軍の小学生もいるんじゃないかというふうに思います。では、親の方はどう思っているのかということを聞いたのが次のグラフなんです。学校五日制の不安として挙げられているのが、学力の低下と、子どもの生活態度の乱れというものが非常に高い。そして非行の増加なんです。学校五日制で良くなる面が有りますかということを聞いたところ、家族団欒の時間が持てるという意見がプラス面では多いわけですけれども、実はいい面より悪い面の方が多いではないかというふうに答えてる親の方が割合が高い訳ですね。行政に望むこととしては、これはもう多様に分かれますけれども、子供向けのサークルやジュニア教室などを公民館でやって欲しいというようなこと、それから、子どもた

ちにさせたいことというのは、スポーツや部活や、色々な学科や講座に参加させたいというような要望が出ていることが分かるかと思います。それで、プリントの方に戻って下さい。以上の、私が見た限りのデータの報告見ますと、子どもたちは、基本的な生活習慣が身につかないまま成長しており、特に、小学校から中学校に上がるときに一つの転機を迎えていることが分かります。親は、雇用環境が厳しい中で、子どもの基本的生活習慣の形成に鈍感になっています。学校五日制の実施に対して、学力低下と基本的生活習慣の乱れの心配など、学校にお任せしていた問題に対してとても不安だと思っているわけであります。では、学校が五日制であろうがなかろうが、家庭の中ではどんなふうに躾をしているのか、家庭の中で教育をしているのかということに関しては、ほとんど関心を持たないまま、不安を抱いている状況ではないかと思われるわけです。

古賀

ありがとうございました。子どもたちの生活調査について、データを示してお話しいただきました。福岡市や福岡県は、5年毎に保護者の意識調査、先生の意識調査やっておりまして、たまたま、2ヶ月程前に、福岡市のデータを分析する機会がありました。まだ中身は公表されておりませんので、申しあげられないんですが、今のお話に関連することで、一つだけ申しあげると、お父さんの帰宅時間ですね。お父さんの帰宅時間は、もう9時以降が4割近いです。ですから、一緒にご飯も食べられない家庭が出てくるということと、もう一つ、小学生・中学生・高校生の父親を比較しますと、中学生の父親が一番帰宅時間が遅いわけです。まあ仕事が忙しいってことがあるとは思いますが、母親の生活時間についてお話しいただきましたけれども、父親も含めてですね、ほんとに、確実に子どもと一緒にいる時間が少なくなってきている。ということが言えるのではないかと思います。

子どもたちの状況についてお話しいただきました。上野さんから、子どもだけ見ていてはだめだ、子どもと親、両方の生活実態を明らかにしていかなければならないと提案がありました。いつ頃からだったでしょうか、コンビニのレジの前にドリンク剤の棚ができたのは。夜のコンビニに行きますと、夜の10時くらいに学習塾の帰りの子どもが、ユンケル黄帝液を飲んでいます。極端な話ですが、なぜタモリがユンケル黄帝液を宣伝しているかということを考えたことおありでしょうか。子どもたちに人気があるからですね。じいちゃん・ばあちゃんじゃないんですね。ほんとにユンケル黄帝液を飲まないと生きていけない子どもたちという実態が段々浮き彫りになりました。従いまして、第3ラウンドでは、そういった子どもたちの状態、それから親の側の問題、今たくさん指摘していただきましたけれども、そういった現状を踏まえまして、子どもたちの生きる力を支援する、地域の教育力再生の方策、あるいは、今のお話で行きますと、保護者の生きる力の育成ということも入ってくるかもしれません。地域の教育力を、この学校週五日制の実施ということを転機にですね、どんな形でもう一度作り上げていくことが可能なのか、お話をいただきたいと思います。相戸さんから、実際に活動されていらっしゃいます子育て支援ネットワークのことに絡めて、お話をいただければと思います。

相戸

そうですね、先ほど、親自身が生活体験を、子どもの生活体験を剝奪しているのではないかと、まあ現状をお話させていただきましたが、家庭で過ごす時間が長くなるということでは、家庭での躾を含む、家庭教育力とともに、自主的で行動的な生活をしてもらうために、子どもの最低限の環境が保障されなければならないと思います。そのいろんな子どもを取り巻く環境の中で、大きな部分を占めるのが、親自身の意識ではないでしょうか。週末もですが、平日の家庭の中でも、子どもたちの過ごし方は、子どもの生きる力習得に大きな影響を及ぼすことだと思います。ここで一つ紹介したいんですが、19年前に「家族ゲーム」という映画があったのを覚えてらっしゃる方がいますでしょうか。監督は、森田芳光氏、主演は、松田優作氏です。当時私は結婚はしていませんでしたし、子どもの立場でこの「家族ゲーム」を見ました。未だに印象深く記憶にあったものですから、ホームページで調べてみたのです。驚いたことに、7、80件の家族ゲームに関する情報があったわけなんです。19年たった今でも、その時代の社会問題になりつつありました家族の問題を提言

しつづけているのです。当時は非常にセンセーショナルな映画ということで、話題をよびましたが今でも波紋を広げているようです。映像が見にくくて悪いんですけれども、ここに写真が載っている紙をご覧下さい。この映画を一言で言いますと、一人の家庭教師がある家庭の中に入り込んで、その家庭の中を見ていく、人間関係なり家族関係なりを見ていくというような内容だったと記憶しています。その特徴的な映像のワンシーンに家族の団欒シーンがあります。必ずコマーシャルやポスターで出てくるのがこの写真なんですけれども、これは長いテーブルに、横一列、４人家族が座って、必ず食事を取るっていうシーンなのですが、２時間の映画の中随所に出てくるんです。約20年前に、家族のいびつな姿として話題になったんですが、現在を見てみますと、横一列に並んで食事を取るというのがいびつではなくなってきている懸念があります。一人で摂る、二人で摂る、孤食とまで来ているという現状を見ると、20年前に作られた家族の、家族ゲームという映画が、現在の子育ての典型的な問題になりつつあるという危機感を感じました。こういったこと一つの喩えも含めてなんですけれども、今一度私自身、一人の保護者として何ができるかということを振り替えって考えてみました。一つのキーワードとして浮かび上がってきたのは、「囲む」ということです。先ほどの長いテーブルを、横一線に座っても、家族は家族なんでしょうけれども、結局「囲み」が無ければ、何の向かい合うことも無いですし、相手の顔も見えません。もちろん何らかの気づきも意志の疎通も無ければ、心の通い合いもないわけです。また、あるときそれは、衝突だったり対立だったり、「囲む」ことによってそういう、人間関係のもつれも出てくると思うんです。そのあたりの人間関係のもつれさえも剝奪されつつある中で、向かい合うということが、貴重な生活体験の獲得の場ではないかなと思いました。家庭というものを考えるときに、「囲む」という、ごく当たり前のことを一人の保護者として大切のしていかなければならないかなあと感じました。このことは、家庭の中での「囲み」というのももちろんですが、地域を考えてもそうです。各地域の活動は盛んなんですけれども、それをいざ囲んでるかというと、そこそこの発信のみで終わってるんじゃないかと感じます。あと行政にしてもそうですね。いろんな行政のアクションがあるんですけれども、それが囲まれていない、つながってないというところが感じられます。これらのことを「囲む」ことによってもっともっといいものが生まれてくるのになあと常々考えています。この「囲む」ということは早急に出来るものではないですし、先ほども言いましたように毎日の生活の中で培っていくものだと思います。特に子育てに関しては、小学校に入ったからさあ囲もうというのじゃなくて、やはり生まれてすぐの赤ちゃんの頃から、家庭内で「囲み」、地域で囲んでいく環境が必要だと、感じています。囲むための具体的な行動のためには、囲むためには場所が大切だと考えます。家庭の中では、例えばコタツや、テーブルなど向かい合う道具や場になるのでしょうか。地域にとっても行政にとってもそういう媒体といいますか、「集いの場」がこれからの子育て支援に求められる本当の場なんではないかなあと思います。子育て支援ということは見えにくいかもしれませんが、やはり、施設や行政はそういった、親が日常的に生活していく生活力をつけていく、囲める、力を作るための環境構成をしていく、それが子育て支援ではないかと考えます。学校週五日制は保護者達が、家庭教育の大切さを再認識するチャンスではないかなあと考えております。

古賀

ありがとうございました。それでは続きまして竹本さんお願いします。

竹本

子どもは体験したことを上事に出来ますが、体験してないことにはたじろいでしまいます。日常的に連続的に、生活体験を積み重ね、自主的に何かをやりきった経験は、その子の自信になり、子どもの生活力と健やかな発達を育んでいくのではないかと思います。また、異年齢が集まる空間で生活することで、この有用性を学び、輪の中にいる一人の自分としての可能性を学んでいくのではないかと思っています、自分たちが誰かの役に立つ、自分たちでも、身近なことから、何かを生み出せる、そういった学びが得られることを願い、畑仕事をしたり、資源回収を年４回設け、それで、希望する遊具の購入をしたりしています。また、ナズ

ナ祭りでは、手作りおやつ、手作り遊具の販売をし、学校の友だち、先生、地域の方たちに喜んでもらったりということを行っています。このことで、人に喜ばれることの喜びを知ってほしいということのねらいもあります。異年齢が集まる、群れを成して遊ぶ、これは子どもが集まらなければ話が始まりません。そのためには、親、若しくは周りの大人たち、そして地域の理解なしでは実現しないのです。子どもたちの輪。大人たちの輪、地域の輪、いろんな輪がリンクしあい、その中で温かく見守られて子どもたちが育つ。それが理想の形ではないかと感じます。ボランティアや、職場体験事業の受け入れも、近所にこういった、社会資源があること、そして、その社会資源への理解を深めてほしいと思うからです。一人一人が地域を支えています。その一人一人の顔が見えれば、お互いの存在価値を認め合い、様々な可能性が生まれてくると思います。そして、子どもに関しても、同じで、時間的な連動を感じることが出来れば、みんなで育てていくんだという感覚が芽生えるのではないでしょうか。地域の一人一人の顔が明るく見えるためには、こういう理解しあえるほか、術がないように思います。それを発見する拠点として、近隣の子どもたちが集まる児童クラブはとても近い存在です。まず、在園児の親からということで、子どもの発達の順序、今大切なことはないかを学びあう親講座を企画し、幼児のために親への参加を呼びかけ、親子一緒に体験してもらうことで、児童クラブへの理解を深めてもらい、子どもの輪の上に、大人の仲間の輪を築いてもらうことを願っています。また地域へ向けては、ナズナ新聞の発行、資源回収、ボランティアの受け入れや、ナズナ祭りや行事ごとのご案内なども取り組んでいます。自分たちの住んでいる地域で子どもたちが育っていること、その子どもたちが今どんな問題に直面しているのか、どんなふうに育っているのか、そういった問題提起を地域に向けて発信していくことをこれからの児童クラブに課せられている課題だと思います。今の子どもたちは時間を重ねるごとに地域と町、群れと呼んでいた集団は、時間的にも数的にも質的にも広がっていくことを信じて今出来る身近なことから着実にやっていくしかないと思っています。そのために自分が出来ることは、楽しい学童保育を作ることです。楽しい学童保育を作る、子どもの集まる群れが出来る。その群れの中で生活体験を積む。その生活体験を通じて、親・地域の輪が出来る。その輪の中で、子どもたちが温かく見守られて育つ。その連続性を保てるようにこれからも努力していきたいと思います。

古賀

はい、ありがとうございました。続きまして、松井さんから、ご発言お願いします。

松井

学校で、先生たちが子どもたちに教えていることですが、ある研究会で「昔の仕事」というテーマであるクラスが発表しました。これは石臼だとか千歯とかそんなのを持ち込んでですね、子どもたちに体験をさせるわけです。で、見てましたら、5年生ですが、男の子たちが5人くらいかけて石臼を回すんですが、回らないんですよ。よく見てましたら、駄目ですねえ。で、どう言ったかというと、「これね、昔僕が小さいとき、おばあちゃんが縁側で日向ぼっこしながらこうやって一人で回してたよ。君達そのおばあちゃんの力もないんか。」わざと言うてみたら、だって重いもんとか言ってですね、やっているわけです。これ、私どもの力不足ですが、教師が、持ち込むこと、体験を持ち込むことはいろんなこと聞いてきてやってるんだけども、持ち込んだものが何であるのか、いわゆる教育の中身について教師が果たして、熟知までいかんにしても、知って出来るか。これは今の現在の学校教育の中の一番厳しいところです。資質の向上という言葉で大雑把に言ってますけども、私は、右手の役割、左手の役割そして、中に炒った大豆を入れるときの量の問題。多ければ軽いんですが出てくる粉は荒い、そういう関係を今の教師には十分教えるだけの力を持ってない。また自分自身も勉強してない。だから私は、「おいちゃんにちょっと貸してみるか」と言ってやってみたら、子どもはびっくりするんですね。「なるほど。」僕は子どもの頃体験してるので出来るわけですが。そういうような事柄が、教育の中の中身として不足してる。あまりにも、ぽんぽんぽんぽん跳んで行き過ぎてるんではないか。よく捉えなければならないものがあるというふうに私の立場からは要求しております。

もうひとつは、学校から返すものの最大のものは給食です。返しきりますか。返してもらえる親として、弁当です、ということは、給食を返すということですね。これをやったらですね、大変なことになります。町長、市長にですね、当選するためには、弁当のところは給食にするといったら大体当選するんですよ。どうですか、皆さんの町では。で、私は断固として弁当をやってこうとする。町長はこのところ、今度の選挙戦に、ちょっとまずいと言いましたので、それで、今物議をかもして、この3月いっぱいが期限なんですが。いわゆる中学校の給食は、選択肢を導入することを検討すると言うております。で、私は、選択肢とは何か、教育委員会としては、基本的には弁当である。弁当持ってこない子どもに対しては、何らかの対策を町ではやろうというふうに考えたんだというふうに整合性を図った。そして今やっとりますんで。結局ですね、10数年前から、一日一兆円産業なんですよね、給食は。全国で。これを無しにするとなると、180日から185日くらいが一年間の給食の提供だとしますと、200兆円近くになるわけです。それでぶら下がって生きてる人沢山おるわけですから、これをなくすといったら大変なことになるわけです。もう一発で私の首くらい軽いんですが、飛んでいきますが。しかしまあ、一番毒してるのはそれだ、と私は思っています。こういう公の場で言うのはちょっとまずいかもしれませんが、私が信念でやる。中学の給食が導入されたら、私は即刻辞表を出す。それくらい凝ってるわけです。だけど、日本文化の基本は何なのかと考えますと、文化の最初は、衣食住ですし、その中でも食ですよね。肉ばかりだったらもうガタッて来るんですもん。だったら、食べることに関しては、親が責任もって子育ての基本にしなければいけない。それを人様に任せてですね、朝は食べない、昼は給食、夜は外食産業ではですね、親の姿は全く見えない。これはいつも言ってます。だから、議員さんと戦っていることがあるわけです。まあ、ということで、私はなるものならば給食を一番に返すべきだろうというふうに思うわけです。いずれにしましても、今の基本的な生活習慣の中からですね、やはり考え方を、自分の中に確たるものを持つということは、学校でもでしょうが、親なんですね。先ほど申し上げましたが、生り物はみんなのものという時代、もう今はないわけです。畑に入っただけで泥棒になるわけですから。スイカも取りに行きました。大体二つ取れば満足なんですよね。それ以上食べられませんもん。みかんも取ってくるときは、ポケットに入れてはつまらん。食べれるだけ食べていけ、というふうに親から怒られて、いや、持ち主から怒られていました。これは、地域の教育力ですよね、こういうのは。今は、駄目になっておる。そういう力が。だから、今の子どもたちは、遊ぶ場が非常に、狭くなってきている。遊びの最大の間違いは、大人が子どもから折り込みナイフを取り上げたことである。具体的には言いませんが。ヒゴノカミという言葉ご存知ですよね。これを、大人が取り上げたんです。理由は二つ。一つはあれは危ない、人をケガさせたりするから危ない、というのが一つと、もう一つは、あれを使わなくても鉛筆削りができたという二つの理由があるんです、子どもたちにとってあれは魔法の道具です。ヒゴノカミ一本あれば、竹ヒゴから出来ましたし、飛行機も作れましたし、コマも出来ましたし、いろんな遊びが出来た。どんな遊びごとも、あれ一本あれば間に合うんです。それを子どもたちから取り上げた。私の小指は、第2関節に大きな傷があります。これは5年生のときに稲刈りをしていて鎌で切ったんです。中の骨が白く見えてました。出、これをどうしたかというと、その場でですね、ヨモギの先端をつまんでですね、右手でこうして押し揉んで、でつけました。手ぬぐいを当てるんですね。あれを裂いて巻きました。二日間しときました。で、これです。大丈夫なんです。薬も一つもつけておりませんし、病院も行っておりません。これ、巻いて、このまま稲刈りしたんですもん。巻いて、自分で。そういう治療を知ってましたから。そういう、自分が持ってる科学、人間が持ってる身体のそういう力というものをですね、今の子どもに教えてない。これ切ったら、今の親ならどうします？救急車呼ぶばっかりです。携帯電話ですぐかかってきますね。こういう今の社会ですので、昔の僕たちの時代とは違いますが、しかしまあ、生命力、生きる力、これ、僕は違うと思ってるんですが、そういうのは内在的に持ってるものと思いますので。そういうのを、社会で大人が子どもたちに、どう育てていくか。今、竹本さんがおっしゃったように、異年齢でとかいう形で、私たちはそういったことを習っており

ます。親から習ってるわけではないんです。これはもう、生活の中で遊びの中で勉強したというものを、私たちの立場からすれば、どう仕掛けるか、私は、教育行政は仕掛け人であると思っております。仕事人ではない。それは、心細い行政ですよ。なんもかも手を出して口を出して金を出してということは。金は出しても口は出さないくらいの度胸があってしかるべきではないでしょうか。地域というものをどういうふうにコーディネートするかが、私たちの仕事と思っております。

古賀

はい、ありがとうございました。松井さんは、今お話いただいたように、福間町の教育長をされておりますが、この福間町というところは、「住民参加型のまちづくり」をしていることで有名でございまして、ちょっと前自治省、今の総務省ですが、総務大臣の表彰を受けたくらい頑張っています。教育とか、そういうものについても松井さんが勝手なことやっているのではなくて、まちづくりの中でやってるということですね。

上野

それぞれの家庭に持つ、家庭の文化というものが、ドイツ、ヨーロッパの国では強く残っていて、それはおそらく日本などでは考えられないように、今日にまで残ってるんだろうと思われます。その一つに、パンやスープやぶどう酒の作り方があり、そして子どもに対する接し方というのがある。では、日本ではどうかということを考えてみますと、この10年間のみならず、やっぱり経済発展の中で、そういう機能というものを家庭から失っていってしまった。そこで、三番目のところで私が考えます、日本、地域の教育力の再生という言葉は、非常に魅力的な言葉ではあるんですが、ここのところだけ取り出して再生させるということは、非常に困難であろうと思っているわけです。なぜかといいますと、日本の経済発展というものが、親の教育力や地域の教育力というものを衰退させてきた一つの要因だとすると、そこの、日本の社会経済態勢の抱える問題、矛盾というものを解決することが、地域の教育力の再生と言うことは、非常に困難だなあというふうに思っています。若しくは、言うことが出来たとしたら、非常に理想的な、ユートピア的な話にしかならないなと思ってます。そういう限界というものを踏まえたうえで、今日私たちが出来ることはなんだろうかということを、３つ考えてみました。一つは、先ほど中教審の話をしたんですけれども、家庭と学校と地域社会で、こういうものが非常に機能分化を遂げて行った。これを再編成しなければいけない、私もその通りであると思います。再編成するときに、この再編成を再統合をさせるんですけれども、これをどうやってさせるのかという筋道を見つけていくということが、大切なことではないかと思っているわけなんですね。たとえば、ＰＴＡの研修会なんかに呼ばれていくことがあるんですが、今日の先生は文書取っとけば良かったというふうに言っていただけると、私は嬉しいんですね。その時ＰＴＡの会長さんは必ず言われるんですね。「ここに来てる親はいいんですけれども…」、というふうに大体言われるんです。「来とらん親にやっぱり話を聞いてほしかった」ということを言われるんですね。では、来てない親にどういう働きかけをしたのかということは誰も問わないわけですね。ＰＴＡとしても、来ない親が悪いというふうに思っておられるし、学校の先生方も、いや、来ない親に対して、それは学校教育の領分ではないですからと言ってそのままにされておられる。では、公民館で、そういう親に対してアプローチをしておられるのかと言うと、公民館は人間が少なくなって、そして予算もなくなって、そこまで手が回らん。家庭教育学級をしても人が集まらんので、そこはほったらかしという状況が出てきてるんではないでしょうか。つまり、家庭と学校と地域社会というふうに領域的に分けるのは非常に分かりやすいわけ方なんですけれども、その領域の間の存在する子どもとか、家庭というものが非常に増えてきたんではないでしょうか。増えてきているところをほったらかしのままにしているが、今日の問題だろうと私は捉えています。だとしたら、そこの隙間にたまってしまった底の部分、非常に問題を抱えている部分がほったらかしにされているとしたら、そこの部分にアプローチしていく、問題を明らかにして解決していくというのが社会教育の一つの役割ではないかなと思っております。二つ目には、受け皿です。これ大人と子ども関係の喪失というように書いておりますけれども、これは二つの

ことを申し上げたいというふうに思うんです。一つは公民館などで、土曜日どうしたらいいかというようなことを良く聞く訳なんです。「子どもたちが集まるような事業をどうやったら展開できるでしょうか。」とかですね、そういう問い合わせが良くあるんです。私は、「そがんもんはなか」というふうに大体言います。そういう無駄な努力はやめた方がいい、というふうに言うんです。なぜかといいますと、土曜日だけ切り取って、子どもたちに接していこうとする魂胆自体がもう無理だというふうに思うわけですね。他のテーマパークや楽しいことがいっぱいある中で、土曜日に子どもたちが、「うわ、今度の週末は公民館にいけるけん、楽しか。」と思えるような事業展開を胸を張ってやっていると言える公民館がどれだけあるでしょうか。そういうことできるわけない訳ですよね。予算もない、人手もない、というところで、子どもたちに「集まらんね」と言ったって、知らん叔父さんが、土曜日だけよか顔して、行くほどに今の子どもたちは甘くないと言うふうに私は思うんですね。つまりそれは何かと言いますと、貧弱な体制、貧弱な予算ででも、月曜から金曜まで、公民館や地域社会が子どもたちに関っていくことなしにはですね、土曜日の事業展開はありえないというふうに思うわけです。ですから、子どもたちの生活を土曜日だけどうにかするというのではなくて、家庭や学校や地域社会の再統合を考えるということは、月曜から土曜まで、子どもたちに公民館が、または大人たちがどう関っていくのかという問題抜きには考えられないだろうというのがこの②のところ一つ目の問題でございます。次に二つ目のところです。資料としてのせておりますのは、一番最後６ページのところでございますけれども、地域の教育力をどう高めるのかと言うフォーラムを、昨年の12月に佐賀県の公民館連合会や社会教育委員の会で、やりました。そこで私が最後にまとめを書いておりますので、それを読んでいただければよいと思うんです。私が感じましたことは、簡単に言うと、今地域の教育力の体制というふうに言ったときに、親が子どもに関るというのは、これ、当たり前の話だろうというふうに思います。それすらなかなか難しいと言う状況かもしれないんですが。では、親が親ではなくて、一人の大人として地域の子どもに関るというのは、非常に難しいというように思います。なぜなら色々な教育の犯罪、子どもの犯罪などを巡って、その犯罪を犯す犯人は、地域の大人だったりするという場合があります。と言うことで、つい先ほどの池田小学校の事件でも地域の大人たちを信用できない、また信用してはならないと言う環境が出来ていく中で、どんなに大人の側が、好意的に関っていこう、ボランティアとして関っていこうと思っても、子どもの方が警戒をしてしまうという事態が生まれてしまっているだろうというふうに思います。そこのところを乗り越える議論を実は高めていかなければならないと思います。それを乗り越える議論というのは、大人と子どもが日常的に関係を持っている、顔見知りであるという関係を、作り出していく以外にはないなと思うことと、もう一つは、大人の側が自分の子どもに対してだけではなく、子どもに関っていくことが楽しいというふうに思えるような感覚、またそういうような体験というのを大人自身が持っていることが必要だというふうに思っているわけです。ですから、先ほど、相戸さんも竹本さんもおっしゃったわけなんですけれども、子どもの側の問題でなく、親が子どもたちに関っていくことは楽しいと思える体験をどう作り出していくことが出来るのか、これが社会教育の二つ目の課題だと思っています。三つ目は、教育を支える地域的な基盤と書いております。今、学校教育の世界では、通学区域の妥協化という議論がなされていますが、私はこれは非常に慎重に対応していかなければならないというふうに思っております。というのは、教育を支える一点が、地域的な教育の基盤だということを考えるからなんですね。中学校で職場体験をされる、では通学区域が弾力化された中で、誰がこの学校を支えていこうと思うのだろう、子どもたちを受け入れていこうと思うのでしょうか。見ず知らずの遠方から来ている子どもたちに、地域の大人たちがにこやかに挨拶をするということがあるだろうか。また、逆に言うと、子どもたちが、通学区域の学校がある校区の大人たちに挨拶をするということがあるだろうか。また、総合的な学習の時間というのは、これまで以上に地域との関係というものを太くしていかないと授業展開が出来ない。授業展開が出来ない段階で、ゲストティーチャーがわざわざその学校に協力に行くということがどれだけあるんだろうか。そういうことを考えてみたときに、

教育を支える地域的な基盤というものをどう作っていくことができるのか。これはもっと言えば、それぞれの地域における教育計画をどう立てていくのかっていう議論になっていくわけなんですけれども、このような地域的な基盤を形成していくということが、社会教育の三つ目の課題に今日なってきているのではないかと思っているところであります。以上です。

古賀

はい、ありがとうございました。これで、シンポジストの方のご発言は一応終わります。私の方の時間調整がうまくないものですから、押してまいりましたけれども、フロアーからのご質問を、先着お二人だけ…はい、お二人だけいらっしゃいませんか。すみませんが、ちょっと後の日程がございますのでお二人だけで申し訳ございません。いかがでしょうか、ご質問ご意見ございましたら。はい、では。

男性

福岡市早良市民センターの長谷と申しますが、先ほどから聞いていると、今の子ども、そして親も含めてですね、非常に暗いデータや話、光がないようなところもあってですね、どう展開していくのか良く分からないのですが。逆に今の子どもだから持っている力、今の親の、プラスの部分をどう生かすかを含めてですね、かつてのような昔に戻るってことじゃないと思うんです。そういったことをお尋ねしたいと思います。

古賀

えーっと、どなたに？

男性

そうですね。出来たら、今の子どもとか親とかにですね、実際に体験している保護者の立場の方に。

古賀

それでは、相戸さんお願いします。

相戸

私も言いながら、問題点ばっかり言ってたなあと反省しています。子どもたち、子ども自身の力ですね、そのあたりについては、私も今進行形の子育てしていますので、子どもの発達を目の当たりにして感じています。子どもが遊ぶということに対して、今親や行政が、熱心に考えすぎるのか、プログラムを押し付けるという状況があります。本来子どもが自分で遊びを作り出す力とか創造する力をそこで抑えてしまっていると思います。それを、手段や方法など自身の学習の場を、与えてあげることによって、子どもなりに、課題を認識し、本来の子どもの生きる力を養えると思います。それで、子どもをしっかり見つめて、本質を見抜く力を、親自身つけて行く必要性があるかなあと思っています。

古賀

では、もうお一人。いかがでしょうか？はい、ではどうぞ。

男性

北九州市教育委員会の村上と申します。上野先生にもう一度お話をしていただければと思うんですが、いろんな先生方が今日おっしゃった中で、私もビートたけしさんがよく駄洒落で使ってましたが、ある夕食の場面でちゃぶ台でご飯を食べたところが、おかずの減り方が、今晩はとても早い。みんなで眺めあってみたら、隣の子が一人紛れて入っていた。日本にもやっぱりそういう環境があった、と思うわけです。何か上野先生のお話を伺っておりますと、私は、「日常性」という言葉をちょっと思い出してみたんです。日常性が欠けているために、何かの場面を非日常性で組み立てていこうという発想が、なんかどこか、人間が増えて、そのためにみんなが逆に貧しくなる。私も公民館経営に若干、関係しているんですが、一つの例で、上野先生が、じゃあ土曜日、学校休養日だけ、子ども相手にしてどうするか、非常に辛らつなご指摘がありました。まさに、それも一つの考えどころではないか、だから、普遍的に、地域と学校と家庭とがということのあり様がやはり模索されるところかなあと思いますが、先生いかがですか。

上野

先ほどの長谷さんの質問と関連してくるところなん

ですけれども、今日は課題を提起するということで、あまり触れることが出来なかったんですが、私の展望の一つのイメージは、今日の竹本さんのところの実践なんですね。竹本さんのところでどれだけ自覚して、はっきりと、目的意識もってやってあるのか分からないんですけれども、竹本さんのやっておられるような保育園と学童保育がそこそこの地域に立ち上がってくるということが必要なのではないかというふうに思うんですね。それは子どもが小さいときから顔見知りになって、そして、竹馬の友という関係をですね、大きくなってからも持ち続けられる、そういう子ども同士の関係作り、その中で異年齢の中で子どもたちが自主的な集団というものを作って行く、それを一定のスタッフが援助していくというのが、今の保育園、学童保育で、竹本さんがおやりになっておられる仕事なんだろうというふうに思います。これはかつては親が、親がなくとも子は育つと言われたんですけれども、少子化の中で、また、家族の形態が変わっていく中で、親がなければ子どもがもう育たなくなってきた。だとすると、親をどうやって、親として育て上げていくのかということが、この学童保育の課題になってくるというわけなんですよね。

だとすると、親が、子どもが大きくなってから子育てに向かう、特に父親が子どもが中高生に、思春期に入ってですね、父親をしようと思っても、それを子どもの方が受け入れるはずがない。だとすると、子どもが小さいときに、父親がどのような信頼関係を子どもと作っておくのかということが大切であり、そして、親が子どもが可愛いときにこそ子育てをするという楽しさを学習することが出来るのか、それは今、他の場所ではとても出来ないわけですね。家庭の中だって出来ないだろうし、学校に上がってからでもできるというふうには私は思えないですね。

だとすると、子どもが幼稚園・保育園行っている間に、どれだけ、親が、子どもに関り、自分の子育てを対象化することができるような、親同士の関係というものをですね、そこで発見することが出来るのか。そういうことが、学校というよりはやはり、教育と福祉のあの連続性の中で今見つけ出していくことが出来るのではないかなと思うわけです。で、そういうことを考えてみた場合に、やはり校区単位の教育計画・子育て計画というものが重要になってくるのではないか、そのためには、地域教育計画のあり方というものを模索すべきではないかなあと思って、提案させていただきました。

古賀

はい、ありがとうございました。お二人のフロアーからのご質問をいただきまして、そのやり取りの中で、まとめ的な部分が浮き彫りになってきたかと思います。

全体の議論の中で、今日は学校週五日制というものを一つのきっかけにして、どういうふうな子どもたちとの関係を作っていくのか、そういうことが出発のことでありました。そのことに関して、「関わり」という言葉を使わせてもらいますと、二つの問題が、二つの場面が出てきたように思います。一つは、「関わる力」です。関わる力。もう一つが、「関わる場。」場ですね。シンポジストの方が色んな子どもたちとの場面を言った中で、私たちに一番印象に残ったのが、一緒に食事を摂るという食の場、ではなかったでしょうか。居場所、あるいは食の場そういった意味での、関わりの場をどうやって作っていくのか。それは、家庭で地域で学校で、あるいは融合という形で、どう作っていくのかということが、今日の大きな問題になってきたかと思います。

しかしながら、関わる場の確保と共に、関わる力をどうつけていくのか、生きる力という言葉も使われましたが、どうやって、エンパワーメントしていくのか、そのことがこれから、取り組まなければならない課題になってきました。そうしたことの中から、私は、3つのキーワードを探してみました。一つが、異年齢の大切さ。異なった年齢ですね。異年齢の大切さ、これはどの方もおっしゃいました。そして二つ目が、遊びというものの復権、遊びをもう一度見直そう、昔に戻るというのではなくて、創造ということを含めた遊びの復権が浮き彫りになってきたかと思います。そして、三番目が、やはり、関わりの場、に関わることですけれども、生活体験の場。しかもこれは、ご質問にありましたように、日常性が、現実性になるような生活体験の提供の仕方です。バーチャルであったり、たまたまのイベントであったりではなくて、生活の延長の中にある生き生きとした生活が反映されている生活体験。

しかしながら、そのことは、上野さんからご指摘がありましたように、大人たち自身が持っている生活の脆さ、生活の内実の貧しさ、そうしたものを社会経済的な問題枠組みの中で、もう一度捉えなおす必要があると思います。フロアーの皆さんも熱心にお聴きいただきありがとうございました。これをもちまして課題研究シンポジウムを閉じさせていただきます。どうも4人のシンポジストの皆さん方ありがとうございました。